



今回は東近江市佐野町にお住まいの、折りの版画家、田中武さんをご紹介します。京都でデザイン会社にお勤めだった頃の田中さんは、年に1回、年賀状に版画を彫られる程度の活動でした。25年前に能登川に移り住まれた頃から、本格的に郷土玩具を題材にした創作活動を始められました。誰一人知人がいない土地で、ふと入られた喫茶店。そこに飾られていた人形を見た田中さん、これが自分の求めていた物だ！と、と

激しい感動と深い感銘を受けられたそうです。カラフルで躍動感のあるその人形は、『小幡でこ』でした。そしてなんと、その喫茶店のマスターは、もと勤務先だったデザイン会社の同僚でした。人の縁とは不思議なものですね。以来、創作の題

材となる『小幡でこ』の収集と、小幡人形保存後援会『グループ凸(でこ)』の活動にも参加されていかれました。小幡人形保存後援会の会報が発行されていて、もちろん、その表紙は田中さんの作品でした。当時、『小幡でこ』は散逸して滋賀県内にはあまりなかったらしく、また後継者もありませんでした。その頃の田中さんは『小幡でこ』の保存を願って、折りの心を込めて版の製作に取り組んできたと話されていました。

田中 武さん

キラリ まちの人

にぎやわい

第44号

【発行元】株式会社大兼工務店 いちご倶楽部
0748-42-1151

20年程前に能登川青年会議所と旧秦荘町が取り組んだ、金剛聖観音坐像(こんどうしよ)の里帰り運動(金剛輪寺旧蔵、現在米國ボストン美術館(ピゲロー・コレクション)で所蔵されている、海外に流出した日本至宝の文化財の日本での公開展示事業)で実現した、レプリカ観音坐像を題材として作品を創られました。それをきっかけに、秘仏本尊聖観世音菩薩を描

20年程前に能登川青年会議所と旧秦荘町が取り組んだ、金剛聖観音坐像(こんどうしよ)の里帰り運動(金剛輪寺旧蔵、現在米國ボストン美術館(ピゲロー・コレクション)で所蔵されている、海外に流出した日本至宝の文化財の日本での公開展示事業)で実現した、レプリカ観音坐像を題材として作品を創られました。それをきっかけに、秘仏本尊聖観世音菩薩を描



歩くエンサイクロペディア(百科事典)と称された反骨の世界的博物学者で、自然保護

かれた田中さんの版画は、今でも金剛輪寺本堂に安置されている秘仏本尊聖観世音菩薩のお厨子の前に飾られています。一度、紅葉の時期にでも金剛輪寺を覗いてみてください。

運動に命をかけて闘いぬいた南方熊楠に共感され、南方熊楠を題材にされた作品を作っておられます。その版画が、南方熊楠や柳田国男の研究で知られる上智大学名誉教授で社会学者の鶴見和子(故人)さんのお宅に飾られています。鶴見さんは「これが私の宝物よ!」とおっしゃって、訪問客に田中さんの版画を紹介しておられたそうです。歌人でもある鶴見さんは、この版画と作者の田中さんに対してこんな歌を詠んでおられます。



南方熊楠の版画

『曼荼羅図(まんだら)ひらめきし刻(とき) 熊楠の眼のかがやきを映したる版画(はんが)』(田中武 作)

また、折りの版画家として創作活動に取り組むかわら、街並みや建物の保存活動にも深い思い入れを持たれています。現在は保存が決定した旧豊郷小学校の修復活動にも興味を示され、先人が築いた美しい作品を、少しでも多く現存状態を保ちながら活用される折りを捧げておられます。

運動会について

運動会は、一体いつの頃から始まったのでしょうか。もともと運動会という行事は、日本ではなじみの薄いものでした。刀術や弓術、馬術など特定の競技は行われていましたが、体育全般にわたる行事としては行われていませんでした。

運動会という行事は、文明開化の時に西洋から持ち込まれたもので、日本で初めて行われた運動会は、明治7年イギリス人ストレンジによる海軍兵学寮で行われた「競闘遊戯会」と言われています。当時はフィールド・トラック競技が主体で、徒競走や棒高跳び、砲丸投げ等が行われていたようです。徒競走は「雀雛出巢=すずめの巣立ち」、走り高跳びは「ポラの網越え」、砲丸投げは「ふるだぬきのつぶて打ち」といわれていました。これらは現代の運動会の競技に多少なりとも通じるようなところがありそうです。また普及の皮切りは、1878年札幌農学校(現北海道大学)といわれています。

この後、運動会は団体訓練をする有効な手段として、軍事的に利用されるようにもなりました。

こうした動きを経て、運動会の開催回数が増えるに当たって、次第に盛大で楽しいお祭りの色も濃くなっていきます。明治40年頃には、そのプログラムも現代のものに近づき、地域全体のお祭りとなっていきました。

最近の学校で行われる運動会は、プログラムの見直しで、ラジオ体操がなくなりストレッチ体操にかわったり、江州音頭を踊らなくなったりと、時代の変化が現れています。とはいえ、参加する子供たちにとってはまだまだ特別な行事であることには間違いありません。

地域の運動会を、「体育の日」に開催されるところは結構多いのではないのでしょうか。

「体育の日」は、昭和39年に日本で初めて開かれた五輪大会、東京オリンピックの開会式がおこなわれた日を記念して10月10日に制定されたものです。それでは、なぜオリンピックの開会式が10月10日になったのでしょうか? 秋前線が去ったあとの東京地方の晴れの確率が高く、また「晴れの特異日」とされていた為で、この日に選ばれたといわれています。

10月10日が国民の祝日「体育の日」となった1966年から1999年までの34年間に東京地方で「体育の日」に1ミリ以上の雨が降ったのはわずか5回でした。ところが、体育の日が10月第2月曜日に変更となった2000年から2003年までは雨が3回も降り、多くを数えています。

現在では、「晴れの特異日」は10月10日ではなく、11月3日になっているそうです。



9月26日 AED取り扱い説明会を実施



当社玄関に設置しました

従前の除細動器は、医師などの専門家が使用することが想定されていたため、手動式でしたが、AEDは操作を自動化して医学的な判断がでない一般の人でも使えるように設計されています。操作はいたって簡単で、AEDが発する指示音声に従ってボタンを押すなど3ステップの操作のみで、取り付けも図でわかりやすく説明されています。

AEDによる除細動の施行と併せて、そばにいる者が心臓マッサージ・人工呼吸を継続して行うことも救命のために不可欠です。心臓マッサージと同等に、義務ではありませんが、AEDも訓練しておくことをお勧めします。

皆様こんにちは。私は株式会社大兼工務店 安全協議会長の森原勇治です。安全協議会は、大兼工務店から仕事の依頼をされている協力業者、及び材料納入業者で構成されており、良い仕事を安全に、工期内に納めるため日々研鑽しています。具体的には、毎年1月5日には安全祈願祭、6月1日には安全大会、10月に教育

研修会、12月1日に年末特別研修会を行っています。また、毎月1回、現場安全パトロールを大兼工務店と会員で行い、「ゼロ口災」を目標に努力しています。

このたび安全協議会では、万が一に備え、現場で働く職人はもとより、近隣の皆様にお役に立てばとの思いから「AED」を大兼工務店の事務所に(必要に応じて現場にも)設置しました。突然の心肺停止で最も重要なことは時間といわれ、迅速な救命処置が、人の命を救えるかどうかを左右します。緊急時、大兼工務店に連絡ください。近くであればAEDをお届けしますので、どうぞお役立てください。

AED(自動対外式除細動器)について

最近よく街角で目にする「AED」の文字。人命救助に関する機器ということは知っているけど...という方のために、今回知識を深めてもらおうと思います。まず名称からですが、AEDは「Automated External Defibrillator」日本語で「自動対外式除細動器」と言います。この機器の要点を述べると、「細動」を「除する」機器です。細動とは、心臓の心室が小刻みに震えて全身に血液を送ることができない状態をいいます。これを自動的に電気ショックで取り除くというものです。

使い方は、電源を入れ、電極パッドを胸に張り付けると心電図を解析して電気ショックを与え、電気を調べます。万が一、健康な人に取り付けても作動しません。電気ショックが必要と解析した場合には、機械の指示に従ってスイッチを押すと電気ショックを与えられます。

従来除細動器は、医師などの専門家が使用することが想定されていたため、手動式でしたが、AEDは操作を自動化して医学的な判断がでない一般の人でも使えるように設計されています。操作はいたって簡単で、AEDが発する指示音声に従ってボタンを押すなど3ステップの操作のみで、取り付けも図でわかりやすく説明されています。

AEDによる除細動の施行と併せて、そばにいる者が心臓マッサージ・人工呼吸を継続して行うことも救命のために不可欠です。心臓マッサージと同等に、義務ではありませんが、AEDも訓練しておくことをお勧めします。